

報道関係者各位 プレスリリース

2015年3月16日

一般社団法人コミュニティネットワーク協会
東京家政学院大学

第3回地域プロデューサー養成講座 プレフォーラム

一般社団法人コミュニティネットワーク協会ならびに東京家政学院大学は今般、「第3回地域プロデューサー養成講座」を実施するに当たって、そのプレフォーラムを開催する運びとなりました。

地域プロデューサーとは、地域の課題を解決するため、地元の「人・モノ・カネ・情報」などを駆使して未来図を描き、それを実現していく人のことです。とはいえ、何でもできるスーパーマンになる必要はありません。自分ができないことは「できない」「助けて」と言えることも大切な資質です。

第3回目となる本講座のプレフォーラムでは、30年前から地域プロデューサーの重要性を説き、自らも地域づくりに携わってきたコミュニティネット社長の高橋英與さんによる基調講演、そして地元の過疎化対策に陣頭指揮をとって取り組み、コミュニティネットと協力して介護付有料老人ホーム「ゆいま～る厚沢部」をオープンさせた厚沢部町長の渋田正己さんと高橋さんの対談を行います。

“ゆいま～る”はコミュニティネットが運営する高齢者住宅で現在、全国8カ所で展開しています。今注目されているCCRC(Continuing Care Retirement Community: 健康な時から介護時まで移転することなく安心して暮らし続けることが出来る米国のシニアコミュニティ)の先駆けとも言えるコミュニティを大切に作る住居です。「ゆいま～る厚沢部」のオープンから8カ月後、驚くべきことに入居者の半分近くの方々の介護度が下がりました。そのことが大きな注目を集めています。

少子高齢化が急速に進む私たちの社会における地域プロデューサーの役割とは何か。本講座で語られる内容は日本の未来にとっての重要なテーマでもあり、報道関係者の皆様におかれましては、ぜひ広く周知いただきたく、ご案内申し上げます。

- 日時 : 3月29日(日) 13:30-16:00
- 場所 : 東京家政学院大学(千代田三番町キャンパス1407号室)

■ 当日のプログラム

(1)基調講演 13:30-14:30

◇困難な時代を切り拓く地域プロデューサーへの期待

高橋英與・(株)コミュニティネット 代表取締役社長

(2)対談 14:30-15:30

◇私たちは地域の課題をどうやって解決し、発展させていくのか

渋田正己・北海道 厚沢部町長 高橋英與・コミュニティネット社長

(3)質疑応答 15:30-16:00

本件についてのお問合せ先 (一般社団法人コミュニティネットワーク内)

- 村岡 080-3550-3191 a_muraoka@conet.or.jp

《ゆいま～る厚沢部とゆいま～る那須 その成り立ちと意義》

ご参考として、地域再生のモデルとして注目を集めている2つのゆいま～るについてご説明します。

【ゆいま～る厚沢部】

厚沢部の過疎化をなんとかしたいという渋田正己町長の熱意を意気に感じ、コミュニティネットワーク協会が同町における高齢者住宅へのニーズに関する調査を始めたのは2009年のことです。高齢者住宅を建設する意義は高いとの結論を受け、同年、コミュニティネットが社員を地域プロデューサーとして、厚沢部町が移住者を募るために設立した「素敵な過疎づくり株式会社」に派遣。そこで町の将来像について話し合い、地域の医療機関や民間の介護事業者も加わった実務者会議では「医療・看護・介護をどうするか」という地域包括ケアのあり方に関する議論を重ね、2013年に介護付有料老人ホームとして「ゆいま～る厚沢部」はオープンしました。

町の中心部に位置する「ゆいま～る厚沢部」は、厚沢部町から土地の貸与ならびに入居者支援対策事業として家賃補助、林野庁から建設に地元の木材を活用することを条件に1億円の供出を受けるなど、自治体・行政との連携によって運営されています。また、「仕事を探しに札幌や道外へ行っていたけれども、これで故郷に帰ることができた」「この町で家族をもって子どもを育てたい」というスタッフを採用しており、地元出身の若者のための雇用創出にも貢献しています。

オープンから8カ月後、入居者の半分近くの方々の介護度が下がりました。車椅子の使用者が杖歩行できるようになる、杖歩行の方がそれを必要としなくなる、といったケースがみられたのです。ハウスを地域開放型にして入居者が地元住民の方々と触れ合えるようにというコンセプトが功を奏したといえるでしょう。高齢者住宅が介護・医療保険の負担減に資するモデルとなっています。

【ゆいま～る那須】

サービス付き高齢者向け住宅「ゆいま～る那須」の設立が検討され始めたのは2007年でした。この地に別荘をもっていた人々が高齢化し、老後が心配となって都会に帰ってしまうケースが増えたため、別荘の販売・運営を行う不動産会社から「どうしたらいいか」と相談を受けたのです。そこでコミュニティネットワーク協会は「ここを別荘地から高齢者住宅の建設地へ転換してみてもどうか」と提案をし、コミュニティネットが地域プロデューサーを派遣しました。

広大な森林にどういったハウスをつくるのか。当初はイメージするのも難しかったのですが、入居希望者の方々と現地へ足を運び、「どういう住まい方をしたいのか」のヒアリングしながら話し合いを重ねるなかで、「ゆいま～る那須」のイメージが具体化していき、2010年11月に第1期工事が完了しました。

那須連山の杉材を使った木造の住宅が各ユニットとなって中庭を囲むように建てられた「ゆいま～る那須」では、野菜作りに励む方もいれば、元お蕎麦屋さんが食堂でお蕎麦を打ったり、元美容師さんが入居者のヘアカットをしてあげたり、と自分のキャリアを生かしている方もいる。あるいは町中にパートに出ている方、通院や買い物に出かける入居者のためにハウス巡回送迎車「ゆいま～る号」の運転手を務める方も。

「ゆいま～る那須」は都市部からの移住による過疎化対策、高齢者の仕事と生きがい、自然環境に恵まれた暮らしによる寝たきりや認知症にならないための健康づくり等に寄与しています。